4　香　港

純粋なエンターテイメントの世界

沢田ゆかり

「ここの娯楽は食べ歩きと買い物だけか！」

一九九〇年の夏、香港大学に在籍中のあるアメリカ人青年は、筆者に向かってこのように叫んだ。二週間以上の休暇になると、必ず暇を持て余すのだそうだ。彼は不思議がる。「香港人はこんな狭い島の中で、どうやって日常的な娯楽を見つけるのだろう？」

趣味と実益をかねた賭博

この不遜な問に答えるべく、筆者を含む友人たちはさまざまな案を出した。伍さん曰く、買い物と食べ歩きを除くのであれば、ずばり「賭博」こそ香港人の代表的な娯楽である。博打といえば、マカオのカジノが有名だが、香港だって捨てたものではない。

特に競馬は、イギリス植民地下の産物としては、香港人に最も愛されたものではあるまいか。

狭い香港だが、競馬場は二つもある。水曜日には香港島のハッピーバレー、土曜日なら新界の沙田でレースが開かれる。

しかも近隣諸国の競馬場とは、共通の賭場を立てることができる。競馬場に巨大なスクリーンが設置してあって、例えばオーストラリアのレースの模様が衛星中継される。お客はそれを見ながら賭を行うのである。

香港人が競馬にかける情熱は、お隣の深圳経済特区にまで伝染している。一九九二年二月から深圳でも競馬場がオープンし、大陸の中国人も競馬を楽しめるようになった。もちろん中国政府の公認のもとで、だ。深圳競馬場を運営するのは、香港と深圳の合弁会社「深圳賽馬運動俱楽部」である。会員の多くは、一般庶民ではなく地元の企業や政府幹部だそうだが、もともと香港でも競馬は上流階級の社交場なんだ。かつて香港の政策は、総督府ではなくロイヤル・ジョッキー・クラブで決定されるといわれたほどだ。

映画産業の国際化と現地化

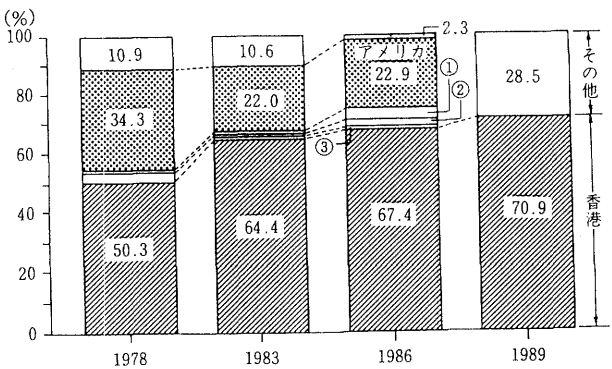
俺は敬虔なプロテスタントだから博打はやらない？　その理屈はよく分からないが、では映画はどうか。映画は香港が世界に誇る娯楽産業だし、若者にとっても一番身近な娯楽になっている。

香港の映画なんて、ジャッキー・チェンのカンフー映画だけじゃないかって？　それは認識不足というものだ。香港映画には、もっと複雑な流れがある。

戦前の映画産業の中心地はやはり上海だったんだが、日中戦争が始まると愛国派の文化人たちが香港に逃れてきた。そうして香港は一時、反日レジスタンス映画の生産基地になっていた。「永華」という撮影所が有名だ。中国大陸で革命が起きたときも、大陸から大勢の俳優や監督が亡命してきた。だから香港映画が戦後に再スタートを切ったときは、上海人など非広東系の大陸人が主な製作者だった。題材も大陸ものが多かったし、もちろん俳優たちの台詞は、大陸の共通語である北京語。地元の観客は広東人だから、耳で聞いても分からない。そこではじめから中国語の字幕が付けられた。

これは香港映画が国際化するには、かえって良かったみたいだ。なにしろ大陸は革命以降、基本的に香港映画の輸入を止めてしまったから、

製作国（地域）別の映画興行収入



① 日本 ② 台湾 ③ 中国；1989年のその他は，アメリカ・日本を含む。

（出所）　香港市政局「八十年代香港電影：第15屆香港国際電影節」，香港市政局，1991年，32ページ。

海外最大の中国人社会である台湾が残された主要市場だった。その台湾では、国民党の政策によって北京語が強力に推進されていて、北京語の映画なら自国産品扱いになった。けっきょく北京語の香港映画は、台湾輸出に有利に働いたわけだ。東南アジアでも、華人の共通語は北京語になってきてるから、同じことだろうね。

君の言ったカンフー映画は、それとは別の系統さ。京劇や粤劇なんかの役者が、西欧化の波のなかで、食べていくために始めたんだ。その先駆けがブルース・リー。洪金寶監督の『七小福』を見れば、イメージが分かるけど、売れない京劇役者がスタントマンのアルバイトで食い繋いだりしている。

ところでジャッキー・チェンの本名を知ってる？　陳港生、つまり香港で生まれたという意味だ。香港は大陸からの移民社会だが、一九七〇年代から香港生まれの人口が過半数を占めるようになる。七〇年代中期からは、こうした香港生まれ香港育ちの俳優や監督が活躍し始めるんだ。ジャッキーの映画は、広東語だろう？　歌謡曲も従来は北京語だけだったのに、このころからサミュエル・ホイとか広東語で歌う歌手が流行する。芸能の現地化ということかな。

一九七〇年代後半からはテレビ・ディレクター出身の監督が登場して、香港ニューウェーブと呼ばれるんだが、彼らは欧米の映画学校で教育を受けている。移民や暗黒街など社会的な問題を取り上げたのも彼らだ。だから扱う題材も香港化している。日本や東南アジアだけでなく、

最近は中国にずいぶん輸出されるようになった。香港の映画は中身が薄いというけれど、その徹底的な娯楽性を売りものにアジア市場を席捲している。

香港映画は趣味じゃない？　じゃあ音楽会は？　香港管弦楽団が毎週、演奏会を開いている。昔はこの分野も二重構造で、華人の一般大衆は京劇や民族音楽専門、クラシックの聴衆はイギリス人と相場が決まっていたが、今はホワイトカラーの増大とともに、華人にも西洋音楽ファンが広がった。しかも学生にも手ごろな値段でチケットが入手できる。日本円で一〇〇〇円もあれば十分だ。

「面白くなければ娯楽じゃない」

うん、確かに京劇は北京で見ればいいし、西洋音楽ならボストンで聴けるよね。だいたい山口文憲も言ってるけど、一〇〇年前までただの漁村だった香港に中国四千年の伝統や本格的なヨーロッパ文化を期待するほうが無理なんだ。中国への返還を控えて先行き分からないときに、めんどうな文芸作品を見て楽しめる余裕のある人間は少ないさ。それにみんな仕事を掛け持ちしてて忙しい。平均的な香港人は、まず一カ月も休暇をとらないものだ。かりにそんな長期休暇がとれれば、海外に出かける。日常的な娯楽は、スケジュールのわずかな間隙を縫うものなんだから。

（さわだ　ゆかり／アジア経済研究所経済協力調査室）